『クリスチャンの上司として』

'23/05/21

聖書個所：エペソ人への手紙 6 章 5-9 節（新約 p.380-）

私たちは、これまで、すべてのクリスチャンがなしていくべき…、「信仰の実践」ということについて学んできました…。まず、パウロが教えてくれたのは、家庭内における夫婦の内、妻に対して…、そして、夫に対するものでありました。次に、親子関係の問題として、子どもに対して…、また、親に対して…。そして、2週間前に学んだことが、社会的立場にあって「使われる側」の立場から見た、信仰の実践です。そして、今日、これから学んでいくのは、前回とは正反対の…、会社などにあって、「使う側」の立場です…。

確かに、今日、メッセージを聞いてくださっている方の中に、会社の社長や取締役の方は、少ないかも知れません…。しかし、実際の社会にあっては、何人かの部下がいるとか…、パートの方たちを使わないといけないなどと言ったように…、多くの方がある種の…、社会的に見て、「使う側の立場」にいらっしゃるのではないでしょうか？

命題：クリスチャンの上司は、どのように働いていくべきなのか？

そこで、今日は、主に、会社などに勤めているクリスチャン…、特に、部下がいるような立場のクリスチャンを想定して、聖書のみことばを学んでいきたいと思います。クリスチャンの上司は、その会社にあって…、あるいは、社会の中にあって…、どのようにして働き…、また、どのようにして、自分の信仰を証ししていくべきなのでしょうか？もちろん、今日のみことばも、クリスチャンとして…、また、人間として…、私たちに大切なことを教えてくれます…。ですから、「いえ、私は専業主婦で何の仕事もしていないから…。私のところは個人経営で、部下なんていないから関係ない…。」というのではなく、しっかりと、その背後にあるみことばの原則というものを理解し、それをそれぞれの環境で実践していっていただきたいと思います…。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日の聖書個所である、エペソ 6:5-9 をご覧ください。初めに、今日のみことばをお読みしたいと思います。

5 奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。
6 人のごきげんとりのような、うわべだけの仕え方でなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行い、
7 人にではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。
8 良いことを行えば、奴隷であっても自由人であっても、それぞれその報いを主から受けることをあなたがたは知っています。
9 主人たちよ。あなたがたも、奴隷に対して同じようにふるまいなさい。おどすことはやめなさい。あなたがたは、彼らとあなたがたとの主が天におられ、主は人を差別されることがないことを知っているのですから。

Ⅰ・その 心構え （基本姿勢）について…（6-7 節）

まず、今お読みしました聖書個所をお聞きくださったら、「あれ？先週とかぶっていません？」と思われたかも知れません…。でも、どうか、9 節をご覧くださいますと、『主人たちよ。あなたがたも、奴隷に対して同じようにふるまいなさい。…』と教えられてありますように…、例え、会社の中では、使う側と使われる側というように、全く逆の立場であったとしても…、クリスチャンとして歩んでいくべき…、その方向性と言うか、その基本的なルールは、そう大きく変わるものではありません。そこで、今日は、前回に学んだ原則を、もう1度、確認しつつ、学んでいきたいと思います。

今日、クリスチャンの上司が実践するべき模範として、私たちが最初に学んでいきたい内容は、その“心構え”について、です。このことに関しても前回と同じで…、その基本姿勢は、私たちがもう既に学んできた内容です。まずは、そういったことを、これまでの復習も含めて…、ご一緒に確認していきましょう…。

●如何なる立場にあっても重要なこと⇒「 仕える 」ということ！

２週間前に学んだ、クリスチャンの部下に対して教えられていた内容は、「地上の主人に従いなさい！」というものでした…。しかし、先程読んだように、聖書のみことばは、クリスチャンの上司に対しても…、「同じように振る舞いなさい！」とは教えますが、でも、当然のことながら、上司に対しては…、「自分の部下に従いなさい！」とは教えません…。これは、一体、どういうことなのでしょう？

実は、今日のみことばが教える、クリスチャンの部下やその上司に共通する教えというのは、5 節ではなくて、6 節以降の内容なのです…。そこの個所をご覧くださいますと、「従う」ということよりも、「仕える」ということの方が、より中心的・重要な内容として教えられていることに気付かされます…。

皆さん、分かってくださいます？…ここの、エペソ 5 章後半以降の一連のみことばが、私たちに教えてくれているのは、「どちらがどちらに従うべきか…」といったような表面的なことだけではなく…、それぞれの立場にあって、どのようにしてイエス様を模範とし…、また、どのようにイエス様を証ししていくのか、というようなことだったはずです！つまり…、私たちが如何なる立場であろうと、重要なことは、「人に仕える」ということなのです…。

…と言いますのは、妻が夫に従うとか…、子どもが親に従う…、あるいは、奴隷がその主人に対して従うなんていうことは、特に、この当時からすると、改めて教えられるまでもないような…、至極、当たり前のことじゃないですか！そうでしょ？…今でこそ…、男女同権・人類皆平等と言われるような時代ですが…、この時代にあっては…、もう既に私たちが学んだように…、妻は、その夫に対して、ほとんど逆らうようなことができなかったのです！奴隷だって同じです！この当時、奴隷は人間ではなく…、むしろ、道具でありました…。単なる、モノとして考えられていたのです。

しかし、そんな中にあって、みことばは教えるのです、「お互いに、仕え合いなさい！」って…。でも実は、それこそが、すべての立場において共通する姿勢なのです…。例え、あなたが妻であろうと、あるいは、夫であろうと…、子どもであろうと、親であろうと…、あるいはまた、奴隷であろうと、あるじであろうと、「人を敬い…、人に仕えていく…」という基本的な姿勢無くしては…、神様に喜ばれることはないのです…。

ですから…、もしも、私たちが、私たちの救い主であられるイエス様を愛し…、イエス様の模範に従っていこうとするのなら…、私たちが、まず最初に実践すべきことは、この…、「仕える者となっていく！」ということであるはずなのです。だからこそ、あのパウロは、ガラテヤ 5:13-14 でも、こう教えるのです。『13 兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。 14 律法の全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という一語をもって全うされるのです。』って…。

みことばは教えてくれています、「あなたたちが救われたのは、自由を与えられるためだ！」って…。しかし、そのみことばが続けて教えてくれていることは、私たちクリスチャンは自由を与えられたからこそ…、その自由を使っての愛を中心とした交わり…、より神の愛というものを実践していくということが必要なのです！私たちクリスチャンが、そのように生きていくことによって…、初めて、「自分の隣人を自分自身のように愛していく…」という、神の律法を実践することが可能になってくるのです！

●『仕える』ということに関するキリストの 模範 （ピリピ 2:3-8）

皆さんは、こんな出来事があったことを覚えておられると思います…。弟子たちの内、ヤコブとヨハネが、

「自分たちが天に行った暁に…、自分たちだけはイエス様に次ぐ栄光の座に着きたい…」というようなことを彼らの母親と一緒に願ったようなことがありました…。後で、残りの弟子たちが、そのことを知って腹を立てた時、イエス様は弟子たちに対して、このように教えられました…。マルコ 10:42-45、『42 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。 43 しかし、あなたがたの間では、そうでありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。 44 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのしもべになりなさい。 45 人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」』

ここでイエス様が教えてくださっているように…、何と、イエス様こそが、まず私たちのために、「仕える」ということを実践してくださったのです。だから、イエス様は、弟子たちに対しても、「それと同じことを実践していきなさい！」と教えられたのです…。イエス様が教えてくださったように、この世の一般的な考えでは、人は益々偉くなっていって、少しでも他人より優位に立とうとします。しかし、イエス様は、そうは教えません！「あなたが霊的に成長していくなら、もっともっと、人に仕える者となっていきなさい！」と言うのです。

だから、ピリピ 2:3-8 のみことばも、こう教えてくれています。『3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。 4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。 5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。 6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、 7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、 8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。』

このように…、イエス様は、誰よりも、『仕える者』であられました…。イエス様は、そのような…、「仕える」というような姿勢を絶えず持ち続けてくださっていたのです！だからこそ、イエス様は、私たちと同じような人間となってくださったのです…。いえ、それだけではありません。イエス様は…、イエス様だけは、罪を御持ちではなかったので、死ぬ必要も無かったのに…、すべての死の中で、最も忌わしく…、最も苦しい、十字架なんていう刑罰を御受けになってくださったのです！それもこれも、私たちのため…、私たちの必要に応えるため…、私たちを罪の裁きから救うためだったわけじゃないですか…。

イエス様は、私たちを救うために、そこまで…、へりくだってくださって、私たちのような者に対しても、「仕える者」となってくださいました…。こういったような、イエス様の例からも明らかなように…、みことばが教える、「人に仕える」ということは…、決して、「その人の言いなりになる…」ということではありません。そうではなくて…、「その人のために善を施す」ということなのです…。だから、イエス様は、ある時に人を責め…、ある時には、人を戒めることもあったのです…。

ですから、私たちも、「人に仕えるから…」と言って、人の言いなりになるのではなくて…、例えば、妻であろうと、夫であろうと、親であろうと、上司であろうと…、例え、自分の立場がどのようなものであろうと…、多くの人たちの必要に応え、善を施し続けていくことが大切なのではないでしょうか？

でも、私たちが、本当の意味で…、周りの人の必要に応え、善をなしていくためには…、私たちが真理を知っていないとできるものではありません。…と言いますのは、その人にとって、何が1番必要で…、一体、何が善であるのか、ということを、誰が、どのように判断できるのでしょう？…そこには、必ず、何らかの基準というものが必要になってくるのです…。私たちクリスチャンには、その判断基準があります…。それこそが、聖書のみことばであり…、神様のみこころなのです。…だから、私たちは、精一杯、聖書のみことばを学んでいるわけですよね…。

Ⅱ・与えられている権威を 悪用 しない！（9 節）

その次に学んでいきたいのは、自分に与えられている権威を“悪用”しない、ということです。今日のみことばの 9 節にも、『おどすことはやめなさい。…』とある通りです。実は、当時には、こういったことが少なからず、行なわれていたからです…。現代でも、「パワハラ」とか言われて、上司が部下に対して、力づくで従わせるなんていうようなことは禁じられていますけれども、…これまで、私たちが学んできたように、例え、自分が夫であろうと…、あるいは、親であろうと、また、上司であろうと、権力をかさにして…、自分のやりたいようにやるというようなことは、決して、神様の前に喜ばれることではありません…。

●「 奴隷制 」と聖書の教え

皆さんもよくご存知の通り、この当時…、特に、ローマ社会にあっては、「奴隷制」というものが一般的でした…。実は、時々、言われることは…、その昔、キリスト教徒が奴隷を利用していた事実を肯定するために、聖書の中に出てくる奴隷の話などを持ち出して…、「聖書は奴隷制を認めている！」と言われたことがありました…。確かに、聖書は多くの個所で、「奴隷に関する発言」をしています。それは、新約聖書だけでなく、旧約聖書においてもそうです。しかし、実際のところはどうなのでしょうか？

実は、これと似たような考え方に、「一夫多妻制」というような考えがあります…。つまり、夫が一人なのに、その奥さんが何人も居る…、というような制度のことです。実際、有名な人物では、アブラハムやダビデ王にはたくさんの妻やそばめと言われる女性たちがいました…。しかし、聖書は、そういった事実を書き留めているだけで、決して、そういったことを勧めているわけではありません…。聖書の中で、結婚に関して、はっきりと教えられている原則は、例えば、創世記 2:24 に、『それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。』と教えられていることを考えると、聖書は、明らかに、一夫多妻制を教えて“いない”ことが分かります。…でしょ？

極々、簡単に説明してしまいましたが、皆さんはよくご存知であったと思います。それと同じように…、奴隷制に関しても…、聖書の中で、所謂、規定（決まり、ルール）というようなものはありますが、奴隷制そのものを推し進めるような教えはありません…。

それどころか…、どうぞ、今日のみことばの 9 節後半に注目してくださいますと、『…あなたがたは、彼らとあなたがたとの主が天におられ、主は人を差別されることがないことを知っているのですから。』とあって、神様は、私たち人間を誰彼、差別することなく、取り扱ってくださることが教えられています。また、それだけではありません…。ガラテヤ 3:27-28 には、『27 バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。 28 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。』とあって…、特に、信仰を持って、救われた私たちクリスチャンには、一切の差別が無いことを、みことばは教えてくれています。実際、だからこそ…、奴隷制度の撤廃に、多くのクリスチャンたちが心血を注いだのだと思われます。

しかし…、最近の行き過ぎた傾向は、一切の“差別”だけでなく…、一切の“区別”をもなくしてしまって、夫や妻…、それに、親と子など、すべてのものを同じように扱おうとするところにあるのではないでしょうか？聖書が、この部分は男性に…、この部分は女性だけに、と教えているような区別を一切認めようとしない傾向が、最近のキリスト教会などにはあるように思われます…。例えば、女性が、教会の長老職に就くなどということが、そういった例の1つかも知れません（Ⅰテモテ 2:12）。…そういったことを支持する多くの人た

ちは、「聖書のみことばは、男女の差別をしないから…」などと言いますが、確かに、聖書のみことばは、男女の違いで差別をすることはしませんが、ある程度の区別はあると、私などは考えています…。

●現代の私たちが　気をつける　べきこと…

しかし、いずれにしても…、こういった聖書の教えから明らかなことは、神様を信じ…、イエス様に倣っていこうとする私たちクリスチャンは、決して、人を差別してはならない、ということです…。人の国籍や外見、または、性別、教育など…、如何なる理由や違いなどによって、私たちは、人を差別したり…、あるいは、見下したりすべきではありません。

じゃあ、私たちは、会社にあって、自分の部下や取引先などの相手に対して、横柄に振る舞ってはいないでしょうか？あるいは、家庭にあって…、自分の妻や子どもたちをぞんざいに扱ってしまってはいないでしょうか？イエス様は、私たちに教えてくださいました…、「仕える者になっていきなさい！」って…。あなたが妻であろうと…、あるいは、夫であろうと、親であろうと、子どもであろうと、同じです。大事なことは、自分のことだけを顧みるのではなく、人のことを気遣ってあげることです…。その人にとって、何が必要なのか…、その人が何を願っているのか…、そういったようなことを、果たして、私たちは考えているでしょうか？

…と言いますのは、さもすると、私たちは、自分のことだけを愛して…、人のことを裁く傾向にあるからです。「あの人は、全然、私のことを分かってくれていない。私は、もっと、こうしてもらいたかったのに…。」って…。そのような、私たちの考えの背後にあるのは、「自分は正しい！私は、1番に扱われたい！」という高慢な思いです。しかし、みことばは教えます。「そうではなく…、人を自分よりもすぐれた者と思いなさい！」って…。ピリピ　2:3　のみことばが、『互いに…』と教えてくれていたように、実際のところはどっちでも良いのです。要は、私たちがどのように考えるか？ということなのです。だから、すぐ後の、ピリピ 2:5 には、『そのような心構えでいなさい…』とあるのです。それは、つまり、私たちの“心の問題”なのです！

ちょっと、ここで、ピレモンへの手紙をご覧くださいます？皆さんもご存知のように、この手紙の受取人であった、ピレモンという人物は裕福なクリスチャンで、非常に、信仰深い人物でもあったようです…。そのピレモンの奴隷であったオネシモが、恐らくは、主人であるピレモンの物を盗んで、逃亡していました。そして、オネシモは、その逃亡中にパウロと出会い…、イエス様を信じて、救われたのです。

そんな、オネシモに対して、パウロは、この「ピレモンへの手紙」を託します…。この当時、奴隷の逃亡は重罪でした…。恐らく、殺されても文句は言えません。しかし、この手紙を通して、パウロはピレモンへ、こう教え、また、願うのです…。11　節、『彼は（＝オネシモ）、前にはあなたにとって役に立たない者でしたが、今は、あなたにとっても私にとっても、役に立つ者となっています。』…つまり、オネシモは信仰によって変えられたのです！一体、どうしてでしょうか？…イエス・キリストを信じたからです！彼は、信仰によって、新しい者へと生まれ変わらせられたのです！そのオネシモのことを、パウロは、ピレモンに対して、こう願います。16　節、『もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、すなわち、愛する兄弟として…』迎えてやってください！って…。

もしも、私たちが、同じクリスチャンである同僚を持つことができたのなら、それは幸いです…。何故なら、同じ主なる神様を信じ…、同じ神様に仕え…、同じ主を恐れて、同じような価値観でもって歩んでいる…、信頼できるパートナーを持つことができるからです…。確かに、そうじゃありません？

しかし、そこには、ある種の注意も必要です…。どういうことかと言いますと…、そこに、私たちの甘えが生じてくる可能性があるからです…。「同じクリスチャン同士だから…。少々のことをしても赦される…。」というような甘い考えです。

今、皆さんがご覧の…、ピレモン書を見てみますと、パウロは自分自身のために、そのオネシモを自分の元に置いておくことは可能でした…。法律的には、元々の主人であるピレモンに返すべきだったのでしょうが、パウロとピレモンとの人間関係は、圧倒的にパウロの方が優位に立っていたからです。でも、パウロは、そうではあっても、敢えて、オネシモをピレモンの元に返そうとします…。そこで、パウロは、こう教えるのです…。どうぞ、12-14　節をご覧ください。『12　そのオネシモを、あなたのもとに送り返します。彼は私の心そのものです。　13　私は、彼を私のところにとどめておき、福音のために獄中にいる間、あなたに代わって私のために仕えてもらいたいとも考えましたが、　14　あなたの同意なしには何一つすまいと思いました。それは、あなたがしてくれる親切は強制されてではなく、自発的でなければいけないからです。』⇒このように、パウロは、同じクリスチャン同士ではあっても、きちんと節度をもって…、一般的な常識を守って、法律的には、ピレモンの方に、その選択があることを理解し…、最終的な決断をピレモンに任せようとしたのです…。

私たちも同じです…。幾ら、私たちが同じクリスチャン同士ではあっても、そこに最低限のルールは必要ですし、節度は守られるべきです…。それ以上に、私たちは今、旧約時代のような…、律法の時代に生かされているのではなく…、「恵みの時代」にあることを覚えて…、すべてのことを愛という動機でもって、自発的に行なうべきではないでしょうか？

皆さんは今、自由です！毎日、どのように歩んでいくのか…。みことばの教えを実践するかしないか…。教会に来るか来ないか…。いえ、それ以前に、信仰を持ち続けるかどうかさえ、皆さんの選択＆手の内にあります。でも、だからこそ、聖書には、たくさんの教えや勧め…、また、励ましや命令…、そして、数多くの歴史や例えなどに満ちているのです。…と言いますのは、私たちがそこから学び、私たちが少しでも正しい選択…、価値ある選択を選び取ることができるようになるためなのです。

Ⅲ・その　祝福　！（8 節）

最後、前回に続いて…、私たちは今一度、神様の与えてくださった励ましと言うか…、その祝福に目を向けたいと思います。もう1度、今日のみことばに戻ってくださいまして、エペソ 6:8 をご覧ください。そこに、こうあります、『良いことを行えば、奴隷であっても自由人であっても、それぞれその報いを主から受けることをあなたがたは知っています。』って…。

●神は、　公平　である！

神様の前に、私たちが奴隷であろうと…、あるいは、自由人であろうと、その原則や基準に大きな変わりはありません。神様が、私や皆さんに願っておられるのは、私や皆さんが、神様に対して、忠実であるか否か、ということだけです。皆さんが、神様の教えに対して…、自分自身の選択でもって、従っていこうとするかどうか…、「そこが大事なのですよ！」ということを、みことばは教えてくれているのではないでしょうか？

神様は、皆さん、お一人おひとりに正しく公平に報いてくださいます…。今読んだみことばには、『それぞれの報いを主から受ける…』とあります。…確かに、私たち一人ひとりに与えられた環境も、才能も、個性なども皆、それぞれ違います。それらを比べることも、また、同じようにするために努力することも無意味です。そういった意味において、私たちが公平になることはできません。…でも、天の神様は、全知全能なので、すべての事情や状況を御存知の上で、私や皆さんに正しい報いを与えてくださるのです…。

少し前に学んだことですが、神様の約束してくださっている祝福とは、まずは、何よりも、皆さんの心に与えられるものです。もしも、皆さんが、神様の前に正しく歩まれるのなら…、まず、皆さんの心が、神様

からの祝福でもって満たされます！…そうして、皆さんの内に「私は神様と共に歩んでいる」というような誇りや満足が与えられます…。また、自然と…、神様への感謝や賛美が溢れてきます。また、そういったことだけでなく…、私たちの心が、助け主であられる聖霊なる神様によって満たされ…、益々、皆さんがキリストの似姿に変えられ…、それによって、神様の栄光が現わされ…、神様のみこころがなされていくのです…。もちろん、そういったような、今現在に与えられる以上のほうびが、今度、私たちが天に行った時に与えられることは、聖書のみことばが教えてくれています。

しかし、ここでも、私たちが注意しなければいけないことは、「神様の祝福というものは、必ずしも、私たちが願う通りではない！」ということです…。人間的に見れば、正直言って…、「神様、どうしてですか？」と思うことが時々あります…。

しかし、神様からの報いは、時に、人間的には判断できないことが多いものです…。例えば、「クリスチャンで最初の殉教者となった」と言われる…、あのステパノのことを思い出してみてください（使徒 6-7 章）。彼は、聖書のみことばによれば、『知恵と御霊に』（使徒 6:10＆6:3）満たされていたような人物でありました。…つまり、非常に、信仰深く、敬虔な人物であったのです。当時は誰も、そのステパノに議論して、対抗することができませんでした。それ故に、群衆は、ステパノを、議会（≒裁判）に引きずり出します…。そこで、大勢の者が、ステパノの顔を見て、『御使いの顔のように見えた…』（使徒 6:15）と、みことばにはあります…。

ステパノは、時の大祭司に会い、弁明することを許されます…。それが、使徒 7 章に記されてある、ステパノのメッセージです。彼は、そこで、大胆に神の言葉を語り、その後、石打ちの刑にあって、殺されてしまいました…。人間的に見れば、ステパノは、志半ばで殺されてしまった可哀そうな人物かも知れません。あるいは、たった1度しかない人生に、失敗をしてしまった者なのかも知れません。…しかし、私たちは知っています！…ステパノは、この地上でのいのちを失った…、その瞬間に天に挙げられたのです！ステパノが死を経験した…、その瞬間に、ステパノは至福の時を迎えることができたのです！あの時、ステパノは自分が誰よりも愛し仕えていた、イエス様とお会いすることができ…、恐らくは、神様から最高の栄誉をいただくことができたのです…。

＜励ましの言葉＞

パウロは、ピリピ 3:17-21 で、こう教えます…。『17 兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。 18 というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。 19 彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。 20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。 21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。』

⇒いかがでしょう？私たちが天でいただける、「永遠のいのち」をご存知ない方たちから見ると、ステパノやシモン・ペテロの逆さ十字架（言い伝えだが）、あるいは、パウロが迎えた殉教の死は虚しい…、失敗だったのかも知れません…。何故なら、未信の方たちは、その後に続く、「永遠」や「神の最善なる御計画」というものを知らないからです。しかし、私たちクリスチャンは違いますでしょ？

ステパノは天に挙げられた…、その瞬間に、イエス様にお会いし…、神様から素晴らしいごほうびである、『栄光のからだ』をいただくことができるのです！…しかも、彼は殉教という死を経験したから、恐らくは、普通よりも早くに、そういった恵みに預かれたのではないでしょうか？…そうして、天の神様は、それと同じような祝福や同じようなほうびを、私や皆さんにも用意してくださっているのです！

ですから、どうか、神様の前に正しいことを、“自発的に”行ない続けていってください。イエス様が、私たちを迎えに来てくださる…、その瞬間に、私たちが悔やむことのないようにしてください…。私たちのいのちが、あと残り、1ヵ月…、1年と言われても…、その時に、それまでの人生を後悔することのないように、1日1日を大切に歩んでいってください…。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。